

1 近代において日記を書くことの意味

西川 祐子

本稿は、2012年6月8～9日に韓国の高麗大学校で開催された国際シンポジウムの基調報告として構成した読み上げ原稿です。通訳付で口頭で発表することを前提に、自著を書評するという試みをしました。これを文章語調に論文化すると、もともとの着想を生かすことが難しいため、編者のお許しをえて、話し言葉の文体を残します。

1. 自著を書評する企て—西川祐子『日記をつづるということ：国民教育装置とその逸脱』（吉川弘文館、2009年）

本日、私は『日記をつづるということ：国民教育装置とその逸脱』（吉川弘文館、2009年）¹の著者として、ここ高麗大学校において開催されている“Searching for Tradition and Modernity through Diary（日記をとおして伝統と近代を考える）”と題した国際シンポジウムに招かれています。私に与えられた題は“*What it means to write a diary in modern period?*（近代において日記を書くことの意味は何か）”です。私はこれに、日記を書くことだけでなく、日記を読むことの意味は何か、という問題をも加えて考えたいと考えます。1つの

¹ 西川祐子『日記をつづるということ：国民教育装置とその逸脱』（吉川弘文館、2009年）を参照のこと。以下、同書目次。第I章：人はなぜ日記をつづるのか／第II章：日記とは何か／第III章：近代移行期の日記／第IV章：日記帳という商品／第V章：家計簿と主婦日記の創出／第VI章：内面の日記の創出／第VII章：戦争日記の世界／第VIII章：日記による戦後再編成／第IX章：未知の編成を生きる—教育装置か、その逸脱か／あとがき／日記帳略年表／主要参考文献一覧 文献案内／索引

日記を通読する、つまり「続け読み」すると同時に、複数の日記を「並べ読み」することも大切です。日記を書くことだけでなく読むことを加えると与えられた講演の主題はほぼ、私の著書の主題と一致します。高麗大学校ではシンポジウムに先立ってこの本の輪読会をしてくださったと聞いて、著者として深く感謝しております。

シンポジウム企画委員会は私にたいして、基調講演では特定の日記をとりあげる事例研究というよりも、日記そのものを論じ、近代の日記一般について総論的に語るように、という要請をくださいま

した。じっさい私の著書は、多くの文芸批評家や歴史家たちがこれまでしてきたように日記内容を研究の資料として利用するのではなく、日記を書くという行為とその結果を研究対象にする日記論であるという特徴をもっています。この本はまた日記を書くという行為を個人の習慣的行動であると同時に集団の慣習ととらえ、さらに近代の日記は社会を維持するための1つの装置であった、と見なす立場をとっています²。

さて、シンポジウム企画委員会から要請をうけて、今日の報告を自分にとっても聞いてくださる方々にとっても有意義な時間にするにはどうすれ



図1 西川祐子著『日記をつづるということ：国民教育装置とその逸脱』吉川弘文館 ニューヒストリー叢書 2009年

² たとえば紀田順一郎は「従来、日記の動機、スタイル、書く時刻、まとめ書き、省略、隠蔽、永続の条件、さらには外国人の日記との本質的な相違などという、日記固有の、いわばハードウェア的な問題を考究した「日記論」というべきものが、ほとんど書かれた形跡がない」（紀田順一郎『日記の虚実』、筑摩書房、1995年、296頁）と言う。西川の日記論はこの要望にこたえようとして生まれた研究の1つである。

ばよいか考え悩みました。総論は抽象的な議論となりやすいのですが、じつは私は、具体的事例の細部にこだわる嗜好をもち、そこから出発して抽象へとゆきつくタイプの研究者です。新しい具体的な分析対象に向き合うと好奇心がわき、思考が活発になります。

私は悩んだあげく、与えられた課題を、自分がかつて書き、出版した自著という具体的対象物を、著者である私自身が書評するという形で報告を行う、というアイデアを得ました。出版された著作は、著者からすでに独立した存在になるのではないのでしょうか。また、著者は、多くの場合、原稿を手放し、本を出版した後も生きることを続け、考えつづけ、したがって成長あるいは変化します。すると著者自身による自著の書評は十分にありうる行為と考えられるのですが、自覚してこれを行った前例は少ないようです。著作はまだ自分自身の一部であり、批評行為主体の批評対象、すなわち批評主体にとっての客体にはなりえないと考える著者が多いからだと思います。私にとっても、現在の私が過去の私が書いた本を読み、書評するという企ては、冒険です。そこで聴いてくださる皆さんに、諭えるならアクロバットに挑戦する未熟な演技者をはらはらしながら見守る寛大さと、できれば共感とをもって聴いてくださることをお願いする次第です。以下で「この本」あるいは「本書」と呼ぶのは西川祐子著『日記をつづるということ：国民教育装置とその逸脱』のことであり、「著者」と呼ぶのは3年（5年）前にこの本を書いたときの私、西川祐子のことです。

一般に書評の役割は先ず、論じる本を紹介することにあります。書評は、書評の読者が書評の対象になった本を読んでもその大体的内容と、本のなかで展開されている主要な議論がわかるように叙述しなければなりません。批評の対象を実際よりも矮小化した上で批評家が高所に立って著者を目下に置き、批判するというやり方は不毛でありましょう。本の内容紹介の後では、批評家は本の著者と水平な目線を交わしうる対等な立場で議論し、その議論が書評者と批評の対象となった本の著者と、そして本の

読者および書評の読者、つまり今の場合は会場にいらっしゃるみなさん、およびこの文章を読む全ての人々の未来にむかって開かれた議論となるよう心がけたいと思います。

2. 日記を書く（つづる）ということ—近代における個体と主体の析出過程から生まれる近代日記

2-1. 印刷、製本、商品化した日記帳の開発

日本語では「日記を書く」あるいは「つづ（綴）る」と言います。「綴る」は糸や布を「継ぎあわす」ことを指し、比喩的には言葉を連ねて文章を作ることを意味します。言葉を連ねて文章をつくるというイメージは、文章で構成される「テキスト」にあたる欧米語が織物「テキスタイル」の類語である関係と似ています。動詞「綴る」には糸や織物がもつ連続性の含意があります。連綿と書き続けることを前提とする日記にふさわしい文学的表現であるというよりも、日記を日々書きつづけてきた人たちの日常感覚が「日記をつづる」と言わしめるのではないのでしょうか。

しかし日記の文章を他のテキストと比較したり、日記を「書くこと」と、日記を「読むこと」とを対比して考えるためには、含意が少なく、端的に書記行為を指す「書く」あるいは「記す」という動詞を使うほうが議論しやすいでしょう。また本日ここで開催されているような国際シンポジウムにおける多言語間の翻訳の問題を考慮にいれると、できるだけ翻訳しやすい、他の言語に対応する言葉がある単語を使うほうが望ましいとおもわれるため、この報告では「つづる」ではなく「書く」「記す」を使います。

著者西川が言うように、「日記を書くこと」には、書記行為だけでなく日記の形態や筆記道具、あるいは誰がどこで、何の上に字を書くかを含めざるをえません。日本社会には、ご存知のように、古代において中国大陸から朝鮮半島を経てもたらされた漢字文化圏に共通する漢字表記の日記と、

漢字を日本語の表音文字として採用し、形を簡易化した仮名表記による日記の2つの伝統があります。11世紀にはすでに貴族階級の男性の書く漢文日記と、貴族階級の女性が書く仮名文字日記というジェンダー規範による区別、その後につづく中世、近世時代に徐々に識字が各社会階層に浸透してゆくにしがって階層別の各種日記が発生します³。それらの各種日記のあいだには紙の質の差があるとはいえ、和紙と呼ばれる手漉きの紙に基本的には筆と墨で記されるという共通点がありました。

むろん明治革命以後、明治政府により日本型近代国民国家が構築される近代になっても、和紙、筆、墨の3点セットの筆記用具を用いる時期がしばらくつづきます。工業生産物である洋紙に、1日の出来事を書き記す欄、天候や郵便の発信受信記録を記す欄など、規格化した枠組みを印刷し、表紙をつけて製本、これに筆記道具としてエンピツを装着させた最初の日記帳は、1887年大蔵省発行の『官員手帖』であると言われます。印刷、製本された日記帳の商品化は1895年末に出版社博文館が発行した『懐中日記』1896年版から始まり、これに『当用日記』がつづきます⁴。以後、明治期を代表する大出版社であった博文館が周到に準備し精力的に展開した販売作戦の効果があって、日記帳に日記を書く習慣は急速に広まりました。

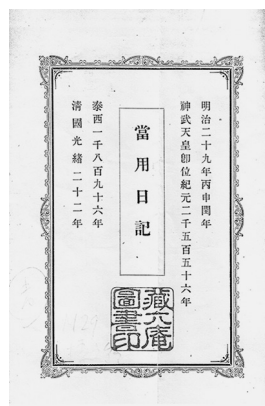


図2 明治29(西暦1896)年用
博文館『当用日記』表紙

³ 松蘭斎『日記の家：中世国家の記録組織』（吉川弘文館、1997年）、同『王朝日記論』（叢書・歴史学研究、法政大学出版局、2006年）を参照。

⁴ 青木正美『自己中心の文学：日記が語る明治・大正・昭和』（博文館新社、2008年）を参照。青木正美は自己の青春時代の日記を刊行するほか、古書商を営むわたら大量の日記帳の蒐集を行った。日本近代の初めに出版された日記帳のコレクションで知られる。

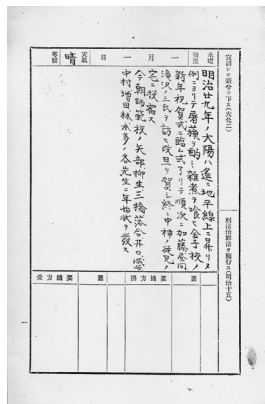


図3 『当用日記』の枠組み

それ以後、博文館以外の出版社のみならず百貨店、化粧品会社、薬品会社なども日記帳を出版、販売して日記帳市場に参入し、商品としての日記帳の大量生産がはじまりました。市場における過当競争の結果、日記帳の出版社は購買者層を細分化してターゲットを定め、使用目的別、日記執筆者の社会層別、年齢層別、職業別、趣味別など日記帳のカテゴリーをかぎりなく複雑化してゆきます。

著者は大まかな数字ながら発行部数を把握し、残された日記帳から天候欄、起床、就寝時刻記入欄、欄外の金言、表紙裏の世界地図、巻末付録などの枠組みを抽出、日記帳の出版から販売までの経路を確認、また日記帳という商品の消費者にたいし聞き取り調査を行っています。むろん日記帳という規格を嫌って、1日1日の枠組みの無いノートブックに長短自由に記される日記も多数存在します。しかし実際に調査してみると、ノートブックなどに記される日記もしばしば、日記帳の枠組みの影響の下に、日記帳日記が書き方指導をするような文体で書かれているのでした。枠組みをもった日記帳という商品の開発は、日記を記すという個人的な行動が集団の慣習となって急速に普及するために、大きく寄与したのでした。このように近代の日記を研究対象とする際に、日記に書かれた内容から日記を考えはじめるのではなく、まず日記帳という明確な規格をもつ1つの商品の開発、その売れ行き、規格のモデルチェンジ、販路拡大とその行き詰まりといった物質的側面と流通から考えはじめる着眼点は日記を日本型近代論のなかで考えるためには有効であったと思われます。

じっさい近代日本の学校教育は、日記帳を積極的に採用し、日記を書くことを奨励しました。日本の小学校教育をうけた人々のほとんど全員が一

定の枠組みのある日記帳に絵日記や植物、動物の観察日記を書いて提出する夏休みの宿題に悩まされた記憶をもっています。この場合、日記は日本語で記す原則です。日記を書く習慣を全児童に習得させるということは、まず第1に共通語としての近代日本語、近代的な国家語つまり国語を日常生活のレベルで強制するということでした。植民地における日本語教育においても日本語による日記が強制されました⁵。もっとも本シンポジウムでその例が紹介されるように、学校教育だけではなく、商品としての日記帳が植民地に普及し、日本製の日記帳に日本語以外の言語で日記を書いた事例がその後に数多く発見されました。

第2には、日記帳の枠組みの強制が問題になります。夏休みの日記には、子どもたちに文章や絵を上達させるだけでなく、早寝早起き、家事や家業の手伝いなどを日記に記録させ、夏休み中の生活を自ら律する習慣をつける教育目的がありました。

子どもではなく大人が書く日記帳となると、提出や検閲を強制されることは少なくはなりますが、日記をつけることにより、自分の時間を管理し、自主的に行動を律する面は残ります。日記帳が国民教育装置であることを直接にうたい、『国民日記』と題した日記帳もありました。近代日本語のなかに国民住宅、国民服など「国民」を冠した単語が続出する時期がありましたから、『国民日記』があることが予想され、事実、存在します。徳富蘇峰の民友社が短期間ですが『国民日記』と題した日記帳を出版しています。しかし、一般に出版された日記帳の大部分は『小国民日記』『学生日記』『女学生日記』『農業日記』『主婦日記』など細別した多様な名称を持っています。題名の多様性は、人々を国民化する回路は決して一通りではなく多様な回路があることを示しているのでしょう。

⁵ 遠藤織枝・黄慶法編『中国人学生の綴った戦時中日本語日記』（ひつじ書房、2007年）を参照のこと。

2-2. 家計簿+日記＝「主婦日記」の発達

商品化された日記帳の中では、『当用日記』と題された誰でも使用できる日記帳から分化した最初の特種な日記帳が「家庭日記」あるいは「主婦日記」と題された近代的な家庭の専業主婦用の日記であったことは注目に値します。じっさい著者も家計簿と主婦日記については特に詳しい調査を行っています。1920年頃から大衆的女性雑誌が家計簿に日記欄を設けた家計簿+主婦日記を新年号の豪華付録としたことによって、家計簿と主婦日記は一般家庭に急速に普及したのです⁶。主婦日記の欄外や巻末付録には、献立や洗濯掃除のやり方だけでなく、子どもの躾、交際など主婦の役割を果たすためのノウハウが細かに記されており、日記の執筆者が主婦らしい主婦へと自己形成をしてゆくことが期待されました。

家計簿の記入は、製造業や商業の経営体であった「家」を代表し拡大家族と従業員を率いて家業を営む家長の手から、核家族ないしは直系家族である「家庭」家族の専業主婦の手へと移りました。この変化は、大きな社会変動の結果でありました。社会の産業化が進み、多くの男性勤労者はサラリーマンとして会社に出勤し、その妻は家庭において家事育児に専心するという近代的性別役割分担の発生が、日記帳から家計簿つき主婦日記が分化するという現象に如実に現れたわけです。



図4 博文館が1924年用に出
版した各種日記帳の広告

⁶ 出版がもっとも長くつづいた婦人之友社の羽仁もと子考案の『家計簿』（1904年～）と『主婦日記』（1907年～）、主婦之友社発行の『主婦之友』誌の新年付録としてつづいた家計簿つき主婦日記などが注目に値する。

近代以前の「家」の日記は、原則として家業の経営体である「家」の記録であり、家業を継ぐ子孫によって保存され、読まれるべき日記でした。家計簿と「主婦日記」もまた、「家」家族よりは規模を縮小した「家庭」家族という1つの集団の生活記録であり、夫の検閲が前提にある、つまり書き手ではない読者によって読まれるべき日録です。その一方で日記の出版社は主婦日記のほかに、さまざまな個人用日記帳を開発してゆきます。商品として日記帳の発行部数を増やすためには、1世帯に1冊の日記ではなく、1人1冊の個人日記のさまざまな種類を開発する必要がありました。

2-3. 「内面の日記」の創出

個人の日記が成立すると、読者があり、読まれることを前提としていた近代以前の日記とはちがって、他人の日記を読んではならないという倫理が発生します。極端に言えば、日記帳は鍵のかかる家の個室の、個人用机の鍵のかかる引き出しに秘匿されるべきものとなります。現実には20世紀前半までの日本社会には鍵のかかる家も個室も数が少なく、個人の日記が家族や訪問客によって読まれる可能性がいつもありました。それにもかかわらず、他人の日記の盗み読みは罪深い行為となったのです。こうして「個人の内面」が発見というよりは「発明」されたのだと著者は述べています。

おなじく著者が言うように、日記帳という商品が書籍出版の出版社によって開発され、書籍と同じ流通販路で販売されたという事実は注目に値するでしょう。小説は近代の産物であって、出版と流通の近代的仕組みがあっではじめて成立したジャンルです。近代小説とは、近代が発明した個人の内面を舞台とする物語ではないでしょうか。読者である近代人が小説を読むという行為には、他人の内面を描いた日記を読むことは禁止されるが、内面の公開である小説は読むことが許されるだけでなく奨励され、読者たちが抱いている他人の日記つまり他人の内面の記録を読みたいという欲望を満たすところがあります。他方、個人日記の作者は日記を他人の目から

隠す一方で実は自分が書いた文章を他人に読ませたい、自分も内面をさらけだして、例えば性の悩みを訴え、さらには告白行為が評価されることにもなる小説を書いてみたいという隠れた欲望を抱くにいたりします。この本には小説本を出版する出版社が、『文芸日記』と題して小説本と同じサイズでよく似た装丁の日記帳を出版した例が引かれています。日記の執筆者は自分の書いた日記帳を、出版された小説本と同じ本棚に並べて置くことができるのです。毎年1冊づつ日記帳が増えることをあたかも自分の小説作品集が増えるかのような満足感をいだいて眺め、日記の執筆にさらに励むであろうという出版社の戦略です。



図5 『新文芸日記』（新潮社、昭和5年用）

さて、ここであらためて「近代において日記を書くとは何を意味するか」という設問に帰ってみましょう。本書には、日記とは何か？という問題を考えるために日記を近接ジャンルである自伝、伝記、歴史、私小説、小説と比較する表が載っています⁷。ここでいう日記とは内面の日記のことです。

⁷ 西川祐子『日記をつづるということ：国民教育装置とその逸脱』（吉川弘文館、2009年）、39頁を参照のこと。

比較の項目は各ジャンルの記述の著者、語り手、視点、主人公、読者、記述人称、時制、物語の一貫性、物語の虚構性、商品化の可能性です。この本にあるように、マトリックスを作成してみるとこれらのジャンル間の境界が非常に曖昧であることがわかります。その一方で、このマトリックスにはテキストの性格が移行する経路がわかるという利点があるでしょう。マトリックスでみると、日記というテキストには、日記作家すなわち日記の書き手と、主人公と、語り手と、読者が同一であるという特徴があることがあきらかになります。つまり日記は自己言及性の強い内在的視点から書かれるテキストだと言うことができるでしょう。日記を他の近接ジャンルのテキストと比較するという試みは日記と言うジャンルの性格をあきらかにするだけでなく、同じ試みを比較文化の視点から試みるならば興味深い結果がでることが予想されます。たとえば日本近代小説の特徴であるとされる「私小説」は以下のマトリックスを見ればわかるように、日記の諸特徴に近い特徴を帯びています。他の文化にも日本の私小説と同じような小説ジャンルはあるでしょうか。

表1 日記と近接ジャンルの比較表

	日記	自伝	伝記	歴史	私小説	小説
著者	日記帳所有者本人	本人	伝記作家	歴史家	小説家	小説家
語り手	本人	本人	伝記作家	歴史家	小説家＝主要登場人物	小説の登場人物
視点	本人の視点	本人の視点	伝記作家の視点	歴史家の、あるいは国民の視点	小説家＝主要登場人物の視点	「神の視点」他、さまざま
主人公	本人	本人	多くは著名人	ある国の国民	小説家本人	主要登場人物
読者	本人原則、出版時には一般読者	本人の知人、一般読者	一般読者	国民、一般読者	一般読者	一般読者

	日記	自伝	伝記	歴史	私小説	小説
記述人称	一人称記述原則、三人称記述もある	一人称記述	三人称記述	三人称記述原則。一人称複数記述可能。	一人称記述または三人称記述	三人称記述
時制	近い過去	過去	過去	過去	過去または現在	過去または現在
物語の一貫性	なし。日ごと完結原則	ある	ある	ある	ある	ある
物語の虚構性	ない原則だが、ある	ない原則だが、ある	ない原則	なくて、ある	ある	ある
商品化の可能性	ない原則だが、ある	ある	ある	ある	ある	ある

3. 日記を読むということ—国民教育装置を読み解き、国民教育装置からの逸脱をも読む

3-1. 「戦争日記の世界」という章

この本の後半部分は、日記をどう読むか、について論じています。呼びかけに応える主体が隷属的主体でもあること、主体化＝隷属化となることはアルチュセールがイデオロギー論で指摘したとおりです。日本の近代教育および社会教育においては早くから、生徒に日記を書かせることが呼びかけに応える主体、能動的な国民を形成する有効な手段であると認識されていました。この本の著者西川は日記を積極的に読むという手段により、国家による動員に応じる国民の側から見た政治史、経済史、思想史を組み立てようとしています。

著者は近代に創出された「内面の日記」と「家計簿＋主婦日記」とを、大きく国民統合準備の時期、植民地進出と戦争の時期、敗戦後の国家再編成の時期に分けて読んでゆきます。この本の「戦争日記の世界」の章は、時代の戦時色が強まるにしたがい、日記帳の表紙裏には一様に日本帝国を

中心におき、戦争の最前線を図解する世界地図が印刷され、教育勅語や軍人勅語が日記の巻末付録となり、日記の各頁の欄外には総力戦の標語が印刷されたと指摘しています。

戦死した日本軍兵士の日記については、キャンベラにあるオーストラリア国立戦争記念館に収蔵されている一連の日記を読むことがなされています⁸。この日記資料群は、空爆だけでなく飢餓と疫病がせまりくるなかで日本軍が死闘をくりひろげたニューギニア戦線において、連合軍側の諜報活動が日本軍兵士の遺体から蒐集した軍人手帳や日記帳が中心となっているコレクションです。絶望の日々が日記に特有の淡々たる文体で記録されていますが、そこには戦線で国家のために死ぬように動員されながら、生きる希望が棄てがたい瞬間もまた記録されています。戦争の前線においてさえ日記を記す行為は放棄されませんでした。



図6 オーストラリア国立戦争記念館所蔵の日本兵士の日記帳

銃後の日記もまた書き続けられます。戦争末期になって全国で紙が不足する事態となっても、日記帳や家計簿を出版する出版社には戦争末期までかろうじて紙の配給がなされていました。「家計簿＋主婦日記」からは、女性たちが戦争の一方的被害者であったのではなく、戦争への献金、労働奉仕、夫や息子たちを戦場へ送り出す行為によって消極的どころか積極的な戦争協力を行ったことが明らかになります。

家計簿の分析からは、総力戦において戦時資金の調達が国家の軍事予算

⁸ 参照 同記念館「豪日研究プロジェクト Australian War Memorial - AJRP」ホームページにて所蔵資料の内容を知ることができる：www.awm.gov.au/ajrp

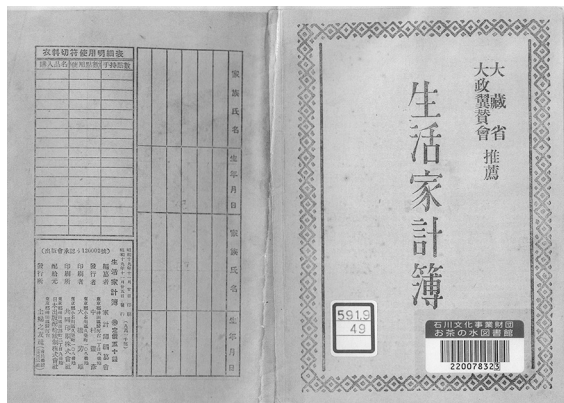


図7 大蔵省と大政翼賛会が推薦した『生活家計簿』
(主婦之友社、1945年用)

の拡大だけでは不足し、行政の末端組織となった町会の隣組が毎月のように国債の購入、戦闘機納入、寄付金募集の名目で各家庭から現金をすいあげていたことが明らかになります。「家計簿のつけ方」を指導する欄には「日常のどんな些細な物資や、短い時間も、出来るだけ上手に使って無駄を省き、1台の飛行機が、1艘の船が1時間でも早く作れるように、家族がこぞって能率をあげて協力せねばなりません」という文章が印刷されています。物資やお金だけでなく時間もまた1時間刻みで管理されること、その管理責任を主婦に負わす意図が見てとれます。

けっきょく日記と家計簿は国民統合の手段として働きながら、その一方で物資とお金と時間、そして人命と人心とをあますところなく戦争遂行という唯一の目的へ向かって吸い上げる国家意思を細部にわたって如実に記録する結果となっています。言葉で書かれた文章は、読まれることによって予定どおり、あるいは予定外の発信をはじめるということがよくわかるのではないのでしょうか。

3-2. 「日記による戦後再編成」の章

この本の著者西川は、国民がラジオ放送の天皇の声により敗戦を知った1945年8月15日の日記を「並べ読み」した結果、この日に自分の考えで日記を書く気力をのこしていた日記執筆者はむしろ少なく、新聞の見出しからとった同じ表現や単語の書き写しが共通して見られると指摘しています⁹。その日の新聞報道は前日から周到に準備され朝刊であるはずの新聞が正午になされた玉音放送の後に配布されるように手配されていたのでした。この事



図8 河邑厚徳編著『昭和二十年夏の日記』（博文館新社、1985年）

実からも日記を書くという作業が個人的であると同時に仕組みられた集団的な作業であり、むしろ集団への帰属をさせる作業であることが判明します。

著者は生涯にわたって日記を書いてきた人々が多く集まる「日本日記クラブ」（小谷信子代表）の集会で行ったアンケート「何故日記を書くか？」にたいして「寝る前に歯磨きをしないと気持ちが悪いのと同じく、日記をつけないと落ち着かない」と回答する人が多かった、と書いています。歯磨きを怠ることのない人たちは規則正しい生活をし、律儀に約束をまもる尊敬すべき人々でありましょう。戦争中も戦後も日記をつづけたこの会の多くの人々は自分たちの真面目さと律儀さが何故、総力戦に動員されたかを生涯のテーマと考えて、会が解散するまでの40年間に会の機関誌でたび

⁹ 河邑厚徳編著『昭和二十年夏の日記』（博文館新社、1985年）はNHKが回顧番組「昭和20年8月15日」のために蒐集した多数の日記の抜粋から成立している。当日の新聞とあわせ読むと、8月15日の日記には新聞記事、とくに見出しを書き写した事例が多いことがわかる。

たび、戦争批判特集を組んでいます。

しかし著者は、戦争協力さらには死地に赴くための自己説得が個人日記をとおして、しかも集団的に行われたと同じく、戦後復興と焼け跡で生きぬくために自分を励ます努力もまた日記を書くことをとおして行われたという、これもまた重要な指摘をしています。

現在の私は、この本の「戦争日記の世界」よりも、「日記による戦後再編成」の章のさらなる重要性を痛感しています。この本が出版された2009年と2012年現在との間に2011年3月11日の東日本大震災という自然災害につづいて、福島第1原子力発電所第1・第2・第3・第4号機のメルトダウンという文明がひきおこした大災害がおこりました。原子力発電で支えられた文明生活を享受してきたのですから、私をはじめとして、ヒロシマとフクシマのあいだを生きた人間はすべて、戦争遂行に協力した戦争イデオロギーだけでなく自分たちの幸福追求のためであった高度経済成長を支えた戦後価値と戦後イデオロギーの再検討をする必要にせまられています。

現在の私から見ると、著者西川が本の中で用いている「戦後イデオロギー」という概念は曖昧にすぎます。むしろ「復興イデオロギー」という概念をたてて20世紀後半に書かれた日記を読み、戦争による焼け跡から何を、どう復興しようとしたかを批判的に検討することができていたなら、私たちが戦争の廃墟からの復興の60年後にふたたび、こんどは高度経済成長の廃墟に立つことになるその道筋がもっと明らかになったのではないかと残念に思います。原発がひきおこした災害からの復興に際しても、家族の再編と国力の復活という「復興イデオロギー」が繰り返されていますが、これでいいのか。復興の内容を真剣に検討するのでなければ、東北大震災の廃墟の向うにくりかえしバベルの塔が再建されて終わるのでないでしょうか。戦後復興と高度経済成長の批判的考察が以前にもまして日記研究の重要課題となったとすることができるでしょう。

じっさいこの本によれば日記帳の出版は戦後も精力的につづけられたの

でした。日記出版の老舗である博文館に勤務していたある編集者が、粗末な紙に印刷した1945年用日記を出版した、1円という定価をつけたと証言しているのですが、その実物はみつかっていません。1946年用の博文館の日記帳は、ふつう前年末に出版されるリズムを崩して、1946年の1月末に出版されています。定価は7円です。1年の時間差で日記帳の定価が7倍にもなったインフレの時代だったことがわかります。

戦後も天候欄、受信発信欄といった日記帳の枠組みはあまり変わらないのですが、欄外に印刷される標語や、巻末の付録が大きく変化します。武装して戦争を遂行する軍事国家にかわる文化国家という単語がつくられ、文化国家にふさわしい国民に自己変革を行うことが奨励されました。日記帳の巻末に軍人勅諭のかわりに新憲法の条文が印刷されました。

しかし、とりわけ戦争中には生徒に愛国教育を行い、天皇のために死ぬことを生徒に教えたと自覚する戦後の青年教師たちの悩みは深く、多くの教師が意匠を変えた日記帳に、くりかえし見る戦場の悪夢、戦争から生きて帰還した負い目、教室の生徒の席にすわっている次世代の子どもたちとどう向き合えばよいのかという深刻な悩みを書いています。たとえば日本日記クラブの会報がたびたびおこなった戦争批判の特集には青年教師たちの投稿がありました。自覚的な個人はそれだけよけいに内発的変革をせまられて悩みます。自己の内面奥深くをのぞきこみ、日記を書き記すことにより主体的な自己をたてなおす大切な瞬間です。しかし悩む過程において、個々人の主権を委譲する先はなぜ相変わらず国家なのかという、より根本的な問題にまで到る例は少なく、多くの日記は、能動的な個人の回復と家族の再編をとおして国家再建に貢献するという決意表明でおわります。この日記論の著者は図書館や古文書館、日記収集家などに公開を前提にして託されている日記帳には次世代の読者たちにその先を考えてほしいという願いがこめられていると考え、日記を書く人たちのグループ「日本日記クラブ」の他に、日記を収集し解読することを目的に集まる「女の日記から

学ぶ会」(島利栄子代表)に注目、両グループ間の親密な交流光景を描いています。

戦後にはむしろ家計簿と主婦日記の出版もつづけられました。戦前、戦中、戦後、そして現在も発行がつづいている『婦人之友』は、敗戦の翌年にあたる1946年6月号で「家計簿をつけ通す同盟」を結成するため、読者に「今年上半期の家計記録を御送りください」と呼び掛けています。以来、この雑誌の年末号には、集めた家計簿から費用別支出の平均値を割り出した家計特集が組まれるしきたりになりました。「家計簿をつけ通す同盟」の同盟員となったメンバーにはもっと細かい分析のある「速報」が毎月おくられてきて、平均値と自分の家計簿を比較して儉約と貯蓄に励む仕組です。

『婦人之友』は1993年4月には創刊90年記念号を刊行し¹⁰、その中には

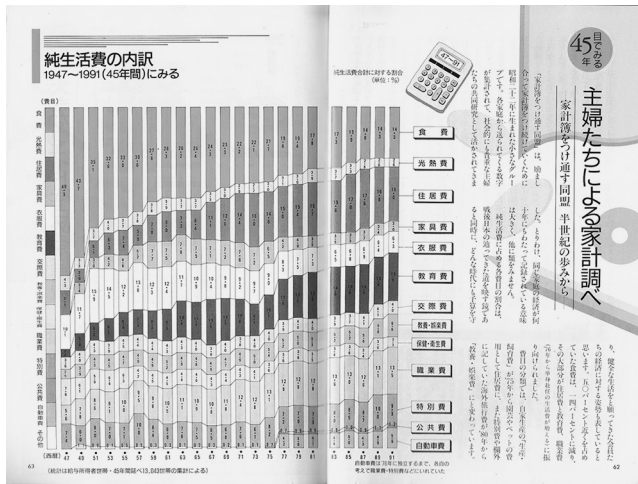


図9 「家計簿をつけ通す同盟」の作成した戦後経済成長の記録

¹⁰ 婦人之友社編「特集 夢は時をこえて：女性が拓いた家庭経済史」『婦人之友』（1993年4月号）を参照のこと。

「家計簿をつけ通す同盟」半世紀の歩みから」と題した記事があり、同盟発足以来の統計表(図9)が掲載されています。廃墟からの復活と高度経済成長の記録として貴重です。この表によると、1947年には、家計の中に食費が占める割合、つまりエンゲル係数は49.3パーセントでした。経済成長の頂点、日本の国民総生産量 GNP が世界第一位に到達といわれた1991年のエンゲル係数は14.3パーセントです。経済発展の頂点があるからこそ以後、バブル経済の破綻が起こるわけですが、当時の社会では中流の上であったと考えられる同盟員たちの平均家計では、食費の割合が減った分だけ、住居費の割合は1947年の7.1パーセントから1991年には16.0パーセントへ、教育費の割合は2.4パーセントから13.9パーセントへと大幅に拡大しています。1977年には自動車費という項目が加えられ、自動車社会が到来したことがわかります。同盟員の80パーセント近くが持ち家の獲得に成功し、子どもたちは高学歴であったと思われます。

しかし家計簿の発行部数はすでに1970年頃からしだいに減少します。原因は1つではありません。まず家計簿+主婦日記を年末号の付録としていた女性用雑誌そのものの終刊が続きました。サラリーマンの夫と専業主婦とその子どもたちからなる「家庭」家族を形成し中間層を増加させてきた家族扶養賃金と終身雇用の制度が崩れ、夫だけでなく妻も労働市場へ参入すると家計簿よりも個人別の出納簿が必要な場合が増えました。消費の単位はそれまで「家庭」家族であったのに、家族から個人という単位が姿をあらわしたのでした。

「内面の日記」も変化します。「内面の日記」の執筆者は近代の初めにおいては、経済資産だけでなく文化資産をもつ特権的知識階級の青年たち、たとえば旧制高等学校生でした。内面を記述する個人日記をつづけるためには、個室と個人が自由につかう時間の確保が必要だからです。ついで特権階級の一部の女性たちが「内面の日記」を記しはじめます。戦後の教育改革によって、男女共学が実現し、経済成長期に進学率が上がると、「内

面の日記」執筆の機会が全社会階層にひろがりました。

3-3. 国民教育装置からの逸脱

個人の日記を書く能力、場所、時間を確保した社会層が厚くなるにしたがい、国民教育装置としての日記執筆から自覚的に逸脱してゆく日記執筆者も出現するでしょう。著者はその逸脱例として中井英夫日記¹¹、八木秋子日記¹²を挙げています。

詩人中井英夫は戦争末期の学徒動員により召集され、当時、市ヶ谷に置かれていた大本営参謀本部航空通信隊に配属されながらも、勤務のかたわら密かに反軍国主義の言辞がならぶ反戦日記を書きつづけていました。彼はその反戦日記を戦後四半世紀が経過した1971年に出版しています。その前年の1970年に、当時は市ヶ谷の自衛隊本部となっていた、戦争中に中井青年が勤務した大本営参謀本部であった建物に、小説家三島由紀夫が軍服に似せた「盾の会」の制服を着て乱入、自衛隊員たちに向かって昭和維新



図10 中井英夫の反戦日記

¹¹ 中井英夫『中井英夫戦中日記：彼方より<完全版>』（河出書房新社、2005年）を参照のこと。

¹² 八木秋子『八木秋子著作集』全3巻（JCA出版、1978～1981年）を参照のこと。

を説く演説を試みた後に割腹自殺をとげるという事件があったからです。中井英夫は、映像にも残されることを意識した三島由紀夫の強烈なパフォーマンスにたいして、戦争中の大本営参謀本部の2階の同じ部屋で反戦日記を書きつづけた学徒兵という諷刺画的な、もう一つの同世代像を対置させておくことが必要と考えたであろうと、著者は推測しています。

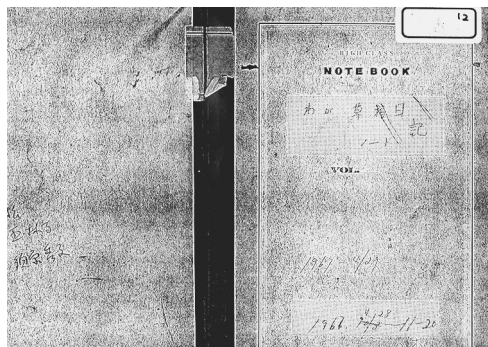


図11 八木秋子の反・高度経済成長日記

もう1つの八木秋子日記は、戦争直前の昭和大恐慌の時期に都市よりもさらに荒廃した農村地帯の農民たちを蜂起させ、自治共同体をつくろうとする運動をおこした女性のアナキズム運動家が戦後に生き延びて書き残した日記です。彼女は戦前にすでに満州国傀儡政権をあやつる日本政府を批判、日中戦争と太平洋戦争、敗戦までを予言した文章を書いています。彼女は戦争がはじまると治安維持法違反で逮捕され、刑期が終わると彼女が予想したとおりの状況が展開している中国東北部に渡り、前線に派遣された南満州鉄道株式会社の社員たちの留守宅相談所という職場で母子家庭をサポートする仕事につきました。敗戦で植民地から引揚げると東京でも同じく母子寮の寮母となって戦争孤児と母子家庭の世話をします。退職後に収入がなく孤独な高齢者として生活保護をうけて暮らしながら、社会の底

辺から高度経済成長期の東京を見据えた貴重な記録を残したのです。この日記を読むと、戦後日本の復興の陰で進行する格差、社会の貧富両極分解という、日記執筆者自身をも追い詰めてゆく次の社会変動の姿がうきあがってくるのです。

そして著者西川は数多くの日記を読んだあとで、国家装置からの逸脱には、中井日記や八木日記のように社会的な逸脱を自覚した人の日記があるだけでなく、国民教育としての日記を書き続ける、徹底的に書きとおすことによって生じるもう一つの逸脱があるのではないかと、言います。

たとえば20世紀後半の多くの家計簿をならべ読みすると、日本政府が貿易黒字の圧縮をせまる外圧に屈してとった内需拡大政策はけっきょく国民に住宅購入のためのローンを組ませることにより家計を圧迫、しかもその後に来る不動産資産の価値下落の結果が中間層の没落につながる事が明らかになります。

内面の日記をよみかえす日記執筆者自身が自分の日記に時代のイデオロギーを発見することも可能です。忠実な兵士の日記ほど戦争の非合理と悲惨をあきらかにするなどの例があります。読まれない前提で書かれた日記が集められ読まれたとき、国民教育装置の仕組みが明らかになる。日記がもっとも大きく国民教育装置から逸脱する現象は、日記執筆者が執筆を放棄する瞬間ではなくて逆に、日記執筆をどこまでもつづけ、その日記が執筆者自身あるいは他者によって反省的に読み返される時に起こるといふ逆説的発見は、日記とは何か、日記を書くという行為、日記を読むという個人的行為にどのような意味があるかという問いにたいする一つの答えになるのではないのでしょうか。

4. おわりに—私領域と日常生活の新しい歴史学を考えるに際して

結局、この本の著者西川は日記研究からみた近代を「印刷し製本した商

品としての日記帳日記の時代」と端的に定義しています。そう言うためには日記帳の時代の始まりとともに終焉を見届ける必要があったはずです。この本の巻末に付された「近代の日記略年表」を参照すると、日本社会では、この本が準備されている最中である2001年に、ウェブ上の日記であるブログ構築ソフトが商品化されて売り出され、以後、ブログ日記とSNS日記が電子媒体の上で急速に広がってゆきます。むしろ電子媒体日記と紙媒体日記は一瞬にしていれかわるわけではないのですが、紙媒体である日記帳の出版部数はブログ普及以後には急速に下落します。著者はこの転換期に立ち会ったがゆえに、始まりと終わりがある日記帳の時代を設定することが出来たのでした。日本社会以外の他の社会では紙媒体日記からブログへの転換はどのように行われたのでしょうか。

現在では日記についての考察を、日記帳の時代だけでなく電子媒体によるブログまでを含んで行うことが必要でしょう。すると、日記は記録の手段であるのか、それともコミュニケーション手段であるのかという議論が浮上ります。一見したところ日記帳日記は記録の手段、ブログ日記はコミュニケーション手段と2方向に分かれるように見えます。しかし日記帳の時代をブログの時代から逆照射して見ると、日記帳の日記にもまた強いコミュニケーション願望があったことがわかります。明治時代にすでに、子規と虚子の『ホトトギス』が同じ日付の日記を全国および外国から募集し、日記の「並べ読み」を試みています¹³。また他人に見せない日記を書く人たちが集まって全国組織のグループを結成、機関誌を発行、多彩な年中行事をくりひろげることを40年間続けた「日本日記クラブ」の例がありました¹⁴。それ以上の年月つづけている「家計簿をつけ通す同盟」の例もありました。

¹³ 西川祐子『日記をつづるということ』、66頁以降を参照のこと。

¹⁴ 日本日記クラブ機関誌『としつき』1号～294号（合本2007年）を参照のこと。

他方で現在、電子媒体のなかで書かれているブログがコミュニケーション願望にもとづいて日々の通信として発信されていることは事実ですが、言葉で書かれている以上、ブログやSNSもまた記録として集積されてゆきます。収納場所が必要な紙媒体資料とくらべると格段に大量な言葉の集積がすでに存在しています。執筆者が執筆目的をどう自覚しようとも、日記もブログも共にコミュニケーション手段であり、同時に記録手段である、と考えるべきでありましょう。

しかし、日記帳日記が形成する主体と、ブログが形成する主体との微妙な違いには注目しなければなりません。日記帳時代にも何種類かの日記を書き分け、同時進行させながら書く日記マニアとでも呼ぶべき人たちが存在しました。しかしブログの時代には、メールアドレスやハンドルネームを数種類もち、SNSの複数のグループに所属することが普通になりつつあります。こうして形成される主体を多面体の主体とでも呼びましょうか。

拡大家族から核家族が析出され、核家族から個人が姿をあらわすにつれ、時間と空間もまた個人化の度合いを強めます。究極の個人化に行き着いたとき、現在すでに、ある反転が生まれているのではないのでしょうか。近代においては個人が家族の一員であり、家族は国家の基礎単位であるという認識が強くもたれていました。個人>家族>国家という包括的な仕組です。しかし移動が加速化している現代では、生涯のあいだ唯一の共同体やコミュニティの中で生きつづけるというよりは、移動をくりかえしながら、多方面にひろがる各種ネットワークを形成してそこに参加しつつ生きる個人が出現しています。

空間の個人化の到着点は、同居人のいないワンルームマンションの部屋です。ここに到着した後、現代の若者たちのあいだではふたたび空間を共有するシェアルーム、シェアハウスが増え、英語起源の日本語「シェア」が流行語となりました。同時に個人が複数の住まいをもつこともめずらしくなく、「マルチ・ハビテーション」なる和製英語がつけられています。

多面的個人のネットワークは国境をこえることがあり、国境の向こうにある別の時間を他者と共有することも有り得るのではないのでしょうか。

女性史や生活史もまた、いわゆる歴史学と同様に、一国史の範囲を出ることなく、せいぜい比較的研究がなされるだけでした。比較という方法にはしばしば矛盾と限界があります。一国史を外へ開こうとして始める比較史であるのに、比較するために逆に国家、民族、文化の違いを強化し、違いを本質的なものと見なしてしまうことがおきる。じっさいここでとりあげている西川の日記論もまた日本型近代をとりあげ、その範囲から出ていません。この限界をこえるためには、日記執筆の基盤にある個々人の日常生活と生活圏を国境内に限定することをやめ、移動と交流の観点から見直す必要があります。個人では難しい広範囲をあつかう研究テーマですが、研究者が国境をこえて交流する共同研究において実現する可能性に期待したいと思います。

これから始まる国際シンポジウム「Searching for Tradition and Modernity through Diary (日記をとおして伝統と近代を考える)」には、問題設定からして今までの歴史学の限界をこえる可能性が含まれています。先ず公文書でなく個人の日記を本格的にとりあげることにより、近代において創出された「公領域／私領域」という二分法をうちやぶり、この二分法こそが近代の産物であることを見極め、家族と国家の時代であった近代、地球儀に国境線が色濃く書き込まれた近代のその先を見通すことが可能になりそうです。女性史や生活史はしばしば、私領域をとりあげるからという理由で、政治史、経済史、さらには思想史か区別され、これまで本格的歴史学とはみなされない傾向がありました。しかし本シンポジウムのテーマのように、日記を本格的にあつかうことにより、私領域と日常生活の歴史学は公領域の歴史学と別なのではなく、私領域と日常生活こそが、政治、経済そして思想闘争の場であることがしだいに明らかになるのではないのでしょうか。2日間の報告を拝聴し、討論に参加する機会をあたえられたことに感謝します。